
Gaynal Fantasy Tactics

pd

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G a y n a l F a n t a s y T a c t i c s

【コード】

N 5 1 7 0 T

【作者名】

p a d

【あらすじ】

F F T x レスリングシリーズ

雪の日の皆で（前書き）

FFT×レスリングシリーズ

本格的夏の文ゲイ祭り 参加作品

文ゲイまとめwiki <http://www46.atwiki.jp/bungeigpw/>

この小説は下ネタめいごを含んでいます。

二次創作・下ネタ・レスリングシリーズを嫌悪されている方の閲覧はご遠慮下さい。

FFTとレスリングシリーズが融合 した中世DEEP DARK

FANTASY小説！

FFTのシナリオをベースにレスリングシリーズキャラが大暴れ！

原作とはちよつと違った進行・展開もあるかも……？

おとこわり

後から章タイトル・登場人物名・地名・その他諸々を変更する可能性があります。

その場合は前書き等に記入するか作者の活動報告にて変更報告をさせて頂きます。

あらかじめご了承願います。

雪の日の誓で

雪の上につつぶせになって寝転がっていると小さい頃のことを思い出す。弟のゆきのりと親友のビリーとその弟のポーの四人でよく雪合戦をして遊んでいた。タマを投げつけられ当てられる度にもっと強くなりたいと願っていたあの頃。

こうしていると肺までしんしんと雪が積もるような感覚に襲われる。

……ずっとこうしていたい。

しかし、迫る時はそうはさせてくれないのだ。先の大戦を戦い抜いたこの皆も盗賊・骸旅団の仕掛けた爆薬によって崩壊しようとしている。先ほどからずっと爆発が続いていて、俺は最初の大きな爆発に吹き飛ばされた。吹き飛ばされたのは何かに向かって走りだしたその時だった。その先にあつたモノ……俺がこの手で救おうとしたモノ……

「ビリー！」

それは俺の一番の親友とその弟。親友ビリーの弟、ポーは盗賊団殲滅作戦に巻き込まれて死んだ。俺の兄の命を受けた騎士見習いが殺した。ビリー達が平民だったために助けることが出来なかった。俺の兄が、俺が、『ベオルブ』が殺したんだ……。

歴戦の砦も度重なる爆発に耐え切れないようだ。もう限界だ、と爆発の度に悲鳴を上げている。それなのにも関わらず、ビリーはポーをその腕に抱き抱えたまま微動だにしない。

彼に救いはないんですか！？ 彼はこんなところで死んでいい人間じゃない！

しかし、ついにその時が来てしまった。全てを破壊しつくす無情な爆発。全てを焦がす無情な炎。最期の爆発を終えた砦は崩れ、ビリーもその中に消えて逝った……。

俺は今まで当然のように生きてきた。

その“当然”が崩れたとき

俺はすべてを棄ててでも、強くなりたい……と心の底から願
った。

予期せぬ邂逅

「またあの日の夢か……」

一年前のあの日のことを未だによく夢に見る。親友を失い、家を棄てたあの日の忌まわしき記憶。実兄が救いようのない男だったこと、親友を救う手立てがなかったこと、それがカズヤに「この世に救いはない」と絶望感を味わわせた。「なら救ってやろうじゃないか。平民も貴族も全て救ってやる。この世に救いがないなら俺が救いになればいい」。そうケツ意したが、生憎その時のカズヤには力がなかった。だからあの日、強くなりたいと願った。

「カズヤ！ そろそろ出発するぞッ！」

この男はゲイン・ルーニー。カズヤと同じ傭兵で件に関してはかなりの腕の持ち主だ。なんでも、五十年戦争時代は騎士団に所属していたらしいが、「そのことは聞くんじゃねえ」と何も語るうとはしない。一年前のあの事件以来、カズヤはこの男の剣技という剣技を見続け、受け続け、学んだ。ルーニーは、今は亡き彼の父とは全く違った剣技の使い手だったので最初は戸惑ったが良き体験となった。

この男は傭兵としても名が知られていて、剣の腕を頼りに新日暮里中に名が知れ渡っている大商会すらも輸送部隊の護衛につけるほどだ。最も、その大半がこの男の「金さえ入れればなんでも引き受ける」という主義をアテにした“黒い噂をよく聞く大商会”なのだが。

「少し待っていてくれ。すぐに準備する」

「ならば先に出発するぞ。どうせ、姫様がいるんだ」

カズヤはルーニーの言葉にうなずいて返事とした。

カズヤ達が今いる場所はオーボン又修道淫。弟のゆきのりの師でもあるコリーナ先生が淫長を務める修道淫だ。任務内容は真良河性近衛騎士団による王女ゆきほ姫のなんば移送における道中の護衛。

後ろには北天騎士団も控えているし賊もそうそう手は出せないだろうが、気は抜けない。王女を亡き者に、と思っっている不逞の輩はいくらでもいるのだ。

ルーニーがカズヤの部屋を出て数分が経ったところであろうか。何か淫内が騒々しい。真良河性近衛騎士団所属のビオランテの部下の声だろうか。大きく叫びながら淫内を走り回っているようだがドアも閉じているせいか伝わりにくい。声がだんだんと近づいてきてビオランテの部下が何と言っているのかわかったカズヤは驚愕した。

「敵襲ッ！ 敵は黒尻の紋章を掲げています！」

黒尻

大國新日暮里を東西に二分し、その東において絶大な力を持つ公爵を指す。その黒尻の紋章を掲げることが許された騎士団こそが剣聖・ホルランドウ伯が団長を務める南天騎士団だ。

「我ら南天騎士団はゆきぼ姫様を亡き者にせんと企む魔の手から助けに参った。大人しく投降するなら命だけは助けてやるッ！」

鋭く威厳のある声が聞こえてきた。おそらく声の主は南天騎士団の部隊長だろう。

「何のことだか知らんな！ 一人残らず奴らを生きて帰すなッ！」

「何を言うか！ 奴らを殺す必要はないッ！ ここで奴らを殺してしまつたらまさに黒尻の思つっぽ！ 追いつ返すだけでいいッ！」

修道淫の外からガフガリオンとビオランテの口論が聞こえてくる。

「準備も終わったところだし、すぐに向かわないと……」

と呟きながらドアを開けた瞬間に礼拝堂の方から、老人のものと思われる短くて低い悲鳴が聞こえ、それを追うようにして若い女性のものと思われる高く長い悲鳴が聞こえた。

「あれは…… コリーナ先生とゆきぼ姫様の悲鳴……？」

聖職者と王家のモノを手にかけるとは何事だ。ホルランドウ伯は亡くなったカズヤの父……天騎士バイバネスと並び騎士の鑑と称される男。伯のいる南天騎士団がそこまで腐敗していようとは、とカズヤは怒りに拳を震わせた。

「安心しろ。急所は外してある。いくらご老体でも死ぬことはあるまい」

「くう………今のは性剣技………教会の洗礼を受けたものが何故私を………」

息も絶え絶えになっているコリーナの声が聞こえてくる。

「お姫サマを拐う上で一番の障害はあなただからな。元上級異端審問官コリーナ殿」

「ッ！！ まさかおまえたちの狙いは………！」

聞こえてくる声を目印に礼拝堂に辿りつく二人の男がいた。一人はコリーナ、もう一人は金の鎧を見に纏った騎士。そこにゆきば姫の姿は無かった。

「そこまでだ！」

カズヤは剣を構えながら走り、金の鎧の男にそのまま斬りかかった。すんでのところで男は振り返りカズヤの剣を剣で受け返した。礼拝堂内に高い金属音が鳴り響く。だが、その男の顔に驚愕し、カズヤは剣を握る手を思わず緩めてしまった。

「……………ビリー？」

どういふことなの………死んだはずのビリーが生きていたとは。しかも黒尻の紋章を身につけて。先ほど剣を握る手を緩めてしまったことに気づかれたのか、その隙をつかれてカズヤは後ろに押し返されてしまった。再びお互いに間合いを取り、剣を構える。

「生きていたのかビリー！」

「貴族への恨みが俺を蘇らせたのさ！ ボーはどうしようもない愚弟だった俺の唯一の肉親だった！ それを貴族が奪った！ 復讐を果たすまで死ぬるか！」

貴族への恨みを吐き捨てて斬りかかってくるビリー。その一つ一つの太刀筋全てに殺気が込められており、一年前までに一緒に修行している時のビリーとは全く違った。

「何故だ………どうして………どうして親友と戦わなくちゃならない

……」
消え入りそうなカズヤの声もビリーには届かず、すぐにビリーの反撃を告げる声が聞こえてくる。

「油断していたら死ぬぞ！」 命脈は無常にして惜しむるべからず……葬る！不動無明剣！」

ビリーが詠唱しながら剣を掲げると剣先に青白い光が集まり、詠唱を終えると同時に剣を振り下ろすと巨大な氷塊のようにも見える青白い刃のようなものがカズヤ目がけて降り注ぐ。すんでのところでビリーの詠唱に反応したため直撃は免れたが、避けきれずに左腕を掠ってしまった。掠っただけなのに左腕全体が麻痺したかのように動かさにくい。

性剣技・不動無明剣。神の加護の宿る剣より繰り出す性なる奥義の一つ。その技を何故ビリーが？

「この一年で成長したじゃないか、ビリー」

「世界をひっくり返す理想のためには強さが必要だからな。この一年、死に物狂いで修行したさ。さあ、お前の強さも見せてみる！」
カズヤの新たな力……それは師でもあるルーニーから学んだ剣技。しかしこれは命を削る。それにこの禍々しい力を親友に使うべきか。少々迷ったがすぐにカズヤは答えを出した。

「言ってくれるじゃないか……なめるなよこの俺を！」 血塗られた剣よ、闇の波動を解き放て！ ブラッドウエポン！」

カズヤが詠唱を終えると同時に剣を振り下ろすとビリーの足元に黒い魔方陣が浮かび上がり辺りが禍々しい闇で満ちた。その闇の中から突如紅き魔剣が現れビリーを串刺しにする。

「くっ…… 餡黒剣に手を染めるとは…… だらしねえし……」

「文句なら俺の師に言ってくれ」

先ほどビリーの性剣技を受けたにも関わらず、カズヤはおっほっほっほ？元気だ（^^）。それもそのはず、ブラッドウエポンには相手の血肉を喰らい術者の体力を回復する作用があるのだ。しかしそれは一時的なもので、長いスパンで考えると命を削ることに

なる。

「お前の親父さんは……ベオルブの名に恥じない男になれとお前に言った。お前の兄者達はベオルブの名を汚してばかり。お前だけは違うと思っていたが俺の見込み違いだったか！」

先ほどの一撃をまともに食らったのにも関わらずまだ立ち上がってカズヤに説教するビリー。日頃から鍛えられたその歪みなき肉体と精神がだらしねえカズヤを戒める力を生む。

「理想の実現のためには強さが必要とはさっきのお前の言葉じゃないか。俺は一年前のあの日以来、強くなりたい……と願いつけてきた。そして見出した活路がこれだ！ この力はいいぞ……」

だが、危ない目つきになり餡黒の力に酔いしれているカズヤにはビリーの言葉は届いていないようだった。

「だらしねえなカズヤ。餡黒の力に頼るお前に救いはないね」

ビリーは剣を掲げ青い光を剣先に収束させ大きな青き刃を作り出した。さっきと同じ不動無明剣だが青き刃の大きさは先ほどのモノとは比べ物にならないほど大きく、少なく見積もっても三倍の大きさはあった。そしてそれをカズヤ目がけて落とした。不動無明剣をまともに食らったモノの時はしばらくの間止められる。カズヤの肉体は石像の如く固まってしまったのだ。意識は残っているのに体は動いちゃくれない。目の前では自分に止めを刺そうと剣を構えるビリー。そんな状況に焦燥の念に駆られるカズヤ。

「もう終わりだあ！ 『天の願いを胸に刻んで心頭滅却！性交爆裂破！』」

ビリーが剣を振り下ろすと時が止まったカズヤの頭上より無数の聖なる光が降り注がれ体を貫く。そして止まった時が動き出したのと同時にカズヤの体はまるで糸の切れたあやつり人形のように静かに音もなく崩れ落ちた。

「待てッ！ ゆきば姫様を返せ！」

ルーニーとピオランテ達が表の南天騎士団の部隊を片付けて礼拝堂内に戻るとそこには床に臥したカズヤと血だらけのコリーナの姿

があつた。その傍らには見知らぬ金の鎧の男。ビオランテは思わず叫んだが時すでに遅し、ビリーは裏口の扉を開けてそこに停めてあつたチヨコボに乗り込んでいた。背中には気を失つたゆきぽ姫を抱えて。

「お姫サマは俺達が預かる。真の強さを身につけたときに取り返しに来るがいい」

そう告げてビリーはチヨコボに合図を出して修道淫を後にした。

「待ってええええええええええええ……ゆきぽ姫……待って……待って……（、；、；、；）」

ビオランテの悲痛の叫びもゆきぽ姫には届かず、その声も修道淫近くの森に吸い込まれていって二度と返ってくることはなかった。

『カズヤ……ベオルブの名に恥じぬ騎士になれ……』

『城の警護なんぞ退屈だぞ。そう思わんか？』

『砂ネズミの穴ぐら』だ……』

『何故、セクロス砂漠へ行つたのだ……？ いくつかの盗賊どものアジトを一斉に襲撃する。そのひとつ、なんばパークス城の南に位置する砦をお前たちに任そう』

『神の前では何人たりとも平等のはず！』

『家畜に神はいないッ！』

『やつらを追え……。草の根を分けても捜し出せ……。ポーを……』

『あなたがベオルブの名を継ぐモノである限り、あなたの存在そのものが私の敵ッ！』

『青いな！ 執政者の手なんぞ黒い血で汚れているモノ！』

『さあ、かかってこいよ！ 家畜は所詮家畜だつてことを教えてやる……』

『ベオルブ家は武家の棟梁だ！ トップとして果たさねばならぬ役割や責任がある！』

『く……くそッ……お前たち……な、軟弱どもに……』

一年前の記憶。カズヤの人生を、ビリーの人生を変えることになったきっかけの出来事の記憶が川の流れるように頭の中を駆け巡った。最期に雪の白と炎の赤がカズヤの頭に浮かんできた瞬間、彼は目を覚ました。

「カズヤッ！」

ルーニーもビオランテも驚きの声を挙げて彼の名を呼んだ。それもそのはず。半日のあいだ死んだように頭からイチモツまでピクリともせず眠っていたのだ。

「うう……痛い……適当になっちゃう……」

まだビリーの性剣技を受けた傷が痛むのかカズヤはうめき声を上げた。

「ふわふわアイス一緒に食べへん？」

そんなカズヤに気を遣ったルーニーだったが、腹痛いと返されてしまった。

ルーニーとビオランテは今後の方針で意見が衝突していた。ルーニーは契約外だから手伝わんと任務を打ち切る姿勢を見せ、ビオランテはビオランテで貴様がいようがいまいがどうでもいいわと、自分たち真良河近衛騎士団だけで搜索する構えを見せた。しかしルーニーは“雇い主”から重要な選択はカズヤに一任せよとの言伝を受けていた。

「カズヤ、今後のことなんだがな。俺は手を引こうと思うのだがお前は どうしたい」

「ビリーが生きていた……確かめなきゃいけないんだ！」

「なんだテメエ、ヤツのこと知っていたのか」

やれやれと言った表情でルーニーが両手を挙げてカズヤの意見に渋々同意した。

「ということであれども同行することになった。が、敵がどこに逃けたかなんてわからんだろう。目星はついているのか？」

ルーニーの問いを受けたビオランテはルーニーの目を見据えて言った。

「ヤツらの逃げこむ場所は決まっている。難攻不落の要塞、ペニス要塞だ……」

ルーニーは正気で言っているのかとでも言いたげな顔をした。それもそのはず、ペニスは五十年戦争の英雄とも言える要塞で、敵国の侵攻をペニス以西に許さなかった、まさしく新日暮里の盾とも言える存在だ。そんなところに侵入するなんて命を捨てるようなものだ。

「行きましょう。姫を利用してしようとするモノの悪事は阻止しなければならぬ」

カズヤはケツ意を固めて言った。ビリーとの戦いで己の強さに揺らぎが生まれた。何としてでも自分の力をビリーに認めさせなければならぬ。あの技さえ使えばなんということはない……という自信もあった。カズヤの鎧黒剣はまだ力を秘めているのだ。

「けつ、わかったよ。行けばいいんだろ」

不貞腐れたように吐き捨てたルーニーだったが本心は違っていた。

こんなこともあるのかと“あの方”は包囲網を敷いている。

お姫サマを逃さない為のなあ……まさかこのような形で網を使うことになるとは思ひもなかったが。ヤツはすぐにはペニスに辿りつくことは不可能だろう。お姫サマも連れてくるし網をかいくぐっていくのは至難の業だ。滝だ。ゼイレキレの滝でチェックメイトだ。

「よし、そうと決まれば超スピードで出発するぞ。貿易都市ドクターから東のアラグアイの森を抜けゼイレキレの滝からペニスに乗り込む」

出発の指揮はビオランテが執った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5170t/>

Gaynal Fantasy Tactics

2011年10月9日03時50分発行